
子猫と昼食を

とかけ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

子猫と昼食を

【Nコード】

N9243H

【作者名】

とかげ

【あらすじ】

入学して二週間弱（強調）。いまだに友達のできない僕は手作りの弁当を今日も一人で食べようとしていた。蓋を開け、いざ食べようとしたその時、頭上からスニーカーが降ってきた。……料理上手だけれどヘタレな僕（自覚有り）と、単語しか話さない子猫のような先輩のお昼に繰り広げられる交流。

第一話 桜の下の物々交換。 その一（前書き）

一応料理については勉強していますが、もしご不満な点や、異論、間違った表現をしている場合は、ご遠慮なくお知らせください。参考にさせていただきます、精進しますので、よろしく願います。

第一話 桜の下の物々交換。 その一

僕が彼女に出会ったのは、高校に入学して間もなく、まだ桜が満開だった頃だった。

通常の授業に慣れた頃、けれどまだ親しく一緒に弁当を食べるような友達はいなくて。一人中庭の桜の木を背に僕謹製の弁当のふたを開けたときだった。

——上から小さなスニーカーが降ってきた。

「……………」

驚いて、思わず見上げた先にひとりの少女がその桜の木の枝に腰掛けていた。

呆氣にとられている僕をよそに彼女は器用にすると木から降りてくる。

ある程度降りたところで、勢いよく飛び降りた先はちょうど先ほどのスニーカーの手前。

何事もなかったかのようにスニーカーに足を突っ込むと、彼女は相も変わらず目を丸くしている僕に視線を向けた。

いや、正確には僕の手になっている弁当へ。

「……………」

「……………」

僕達の間には沈黙が降りた。

「——あ、あの？」

そして先にその沈黙を破ったのは僕。

けれど彼女の視線はいまだ弁当に注がれたままである。

声をかけたはいいいものの、彼女の視線が気になって思わず自分の手にしている物へ僕も注目してしまう。

彼女の目には何か変な物が入っているように見えるのだろうか？僕にしてみれば内容は弁当としてごくごく一般的な物である。

鶏の唐揚げ、金平ごぼう（うちはごぼうは太めでちよっと辛めの

味付けだ）、ブロッコリーにミニトマト、ひじきの煮物、アスパラのベーコン巻き。ご飯の上には出汁をとって残った鰹節と昆布のふりかけ。

料理が趣味の僕は、同居している姉に代わって炊事の一切を引き受けているので、自然と自分の好きなおかずばかりを作ってしまうのだけれど。

内容量は成長期の高校生ということを加味して多めだとしても、ごく一般的な品目のはずだ。

自分の弁当の内容を一通り確認して、僕は視線をまた少女の方へ向けた。

依然として、少女は僕の弁当を見ている。

先ほどは少女本人の体の影に隠れて見えなかったけれど、手にはこの高校に昼休み売りに来るパン屋の紙袋があった。

（木の上でランチでもしてたのかな……）

だとしたらとんだ野生児だ。

ハックルベリーもびっくりである。

ようやく、少女と視線が合った。弁当でなく、僕に興味を持ってくれたらしい。

小首をかしげてじっと見てくる。

「……………」

「……………」

けれど沈黙は再び降りる。

何なんだ一体。

僕が何をしたって言うんだ。

じっと見つめあうこと二十秒ほど。けれどとても長く感じる二十秒だった。

おもむろに少女は僕に歩み寄ってくる。

近づいてきた少女は思ったより小柄だった。たぶん僕よりも頭ひとつ分は小さいだろう。

最初気が付かなかったのは僕が座っていたせいもあるけれど、姿

勢よく伸ばした背筋はピンとしていて優美な猫を思わせる。

興味津々に弁当を覗き込む彼女は栗色の髪を襟足より少し眺めの
ショーボブ。やや釣り上がった、けれど黒目がちな大きな瞳は本当
に猫みたいだった。

（いや、猫というより、子猫だな……）

小柄だし、猫というほど目つきは鋭くない。なんにでも興味を示
す子猫。

心なしか彼女の顔が、今にもよだれを垂らさんばかりに見えるの
は気のせいだろうか。

ふい、とまた視線が合う。結構近いよ。三十センチくらい。肉親
以外こんなに近くで女の子の顔を見るのは初めてなので、ちよつと
緊張した。

「コレ」

しゃべった！

「……………」

「……………」

え、一語のみ！？ 「コレ」ってなんだろう。十中八九弁当のこ
とだとは思っけれど、その続きがないとなんだかさっぱり分からな
い。

とりあえず声をかけたということは会話をする意思が無いわけじ
やないと思ったので、続きを促してみることにする。

「…………『コレ』って言うのは僕の弁当のことですか」

自分でも分かるほどおっかなびっくりな声音だった。しかも敬語。
人間、相手の次の行動が予測できないと、ちよつとした恐怖を感じ
るものですね。初めて実感しました。

僕の言葉を受けて、少女はこくん、と頷く。

この子しゃべる気ないのか。二語以上しゃべると呪われるとも思
っているのだろうか。

でも仕草が本当に子猫みたいで可愛かったので、スルーすること
にした。あんまり変なこと言っ嫌われたくないと思う程度には、

美少女なので。

「ちようだい」

美少女って得だよなあ、なんて徒然と思っていたら、爆弾発言が飛び出ました。

いやいやいやいや、ちよつと待ってくださいキティちゃん（仮）。これは僕の大事なお昼ご飯なので、気軽に差し上げるわけには行きません！ 僕に午後の授業中ずつと腹の虫を鳴らしたままいるとうのですか！？ まだ親しい友達もできていないのにそんなことになったら、最悪いじられて後々いじめられてしまうかもしれません！
「……いや、それはちよつと」

と返事をしたとたん、至極残念無念、恨めしいという目で見られました。美少女キティちゃん（仮）に。それはもうショックを受けた顔でした。

僕は正當な言い分をただけなのに、罪惡感に打ちのめされるという理不尽さ。

なんでだ。僕は悪くない。悪くない、はずだ。……そうだよね、姉さん？

僕が顔の良し悪しに関して世間での理不尽な扱いについて思索している、またもや鈴の鳴る声が。

「交換」

ずいと差し出される紙袋。比較的焼き立てを持ってくるようにしているという、出張パン屋『ひなたのパン屋』の袋。

先ほどはもうすでに食べた後だと思っていたが、どうやらまだだっただらしい。袋からは食欲をそそる香りがかすかに漏れ出していた。「僕の弁当と、そのパンを交換してほしい、と？」

またもや、こくり、と頷くキティちゃん（仮）。

それにしても先ほどから、本当に単語しか話さない。円滑な会話を楽しむ気は皆無なのだろうか。

弁当にそれなりに未練はあったけれど、まだ食べたことの無い出張パン屋さんのパンも僕の興味をひいた。

機会があれば食べてみたくなかったけれど、競争率が激しいし、作った方が結局節約になるという結論から——僕の方だけでなく、姉の分も両方作っているの——まだ食べたことが無かったのだ。「見せてもらってもいい？」

内容を確認しないことには好物だらけの弁当を諦めることはできない。

受け取った袋はほのかに温かった。人肌よりは少し冷めている程度。学校の目と鼻の先に店があるからできることだな、と思った。袋を開けてみると、カレーパン（アンドーナツでないと分かったのはスパイシーな香りがしたから）、トマトとレタスのサンドイッチ、カツサンド、あとレーズンの入った蒸しパンにクリームパンだった。

温かかったのは主にカレーパンとクリームパン。あとは冷たいとは言わないまでも、普通の温度だ。甘党なのかな？

というか、すごいボリュームである。

昼食の量としては普通に運動部の高校生男子並みだ。だってこのカツサンド、普通にロース肉一枚分の大きさだ。肉の厚みに負けないように、パンも若干厚め。うちの姉さんならコレだけで、苦しいというだろうというボリューム。こりゃ高いだろうな。値段もカロリーも。

この小柄な女の子が本当に全部食べる気だったのだろうか。

いやいや、もしかしたら一部持って帰って食べたり、おやつ代わりにしたりするのかもしれない。菓子パンが二個も入っているし。

もしくは友達にあげるとか……いや、友達に上げるとしたら、木の上で食べようとは思わないだろうけど。

あれ、でもそしたら——

「これ、全部もらってもいいの？」

こくり、と頷く。

では遠慮なく。

こうして僕は桜の花びらが舞う中、重要な取引——お昼ご飯の

物々交換——を行っただであつた。

第一話 桜の下の物々交換。 その一（後書き）

一応料理については勉強していますが、もしご不満な点や、異論、間違った表現をしている場合は、ご遠慮なくお知らせください。参考にさせていただきます、精進しますので、よろしく願います。

第一話 桜の下の物々交換。 その二

美味しかった。

さすがプロの作る味。以前パン作りには挑戦したけど、所詮は素人だよな。

カツサンドはまだ衣がさくさくだったし、キャベツがしんなりして食べやすかった。カレーパンも市販のカレーよりちよつとピリ辛でキーマカレーなのか、ひよこ豆がポクポクで美味しかった。

トマトとレタスも素材自体の味がしっかりしてて、コクのあるパンに負けてなかったし。なにより新鮮だった。蒸しパンとクリームパンは甘すぎず、クリームパンに至ってはきつと中のカスタードクリームも手作りだ。パン屋によってはカスタードクリームを業者から仕入れたりするらしいけど、カスタードクリームは新鮮な卵で作った方が美味しいから、僕は業者に頼るよりは自分のお店できちんとクリームを作るパン屋さんには好感が持てる。

それほど甘党ではないので、蒸しパンとクリームパンはキティちゃん（仮）と半分こした。

それにしても、男子高校生仕様の弁当をぺろりと平らげた挙句、菓子パン一個分入る女子高生って……。

ギャ。曾根もビツクリの胃袋である。

持参した水筒のお茶を飲み、人心地つく。キティちゃん（仮）は元々ペットボトルを持参しており、両手で持ち上げてコクコクと飲んでる。まるで哺乳瓶を持っている赤ん坊のような仕草だけれど、妙に似合っていた。ちなみに中身は微炭酸のミネラルウォーター。甘党なのか、辛党なのかいまいち分からない子である。というか、ペットボトルは見たところまったく汗をかいていない。ぬるくなっているだろうそれは果たして美味しいのか？

お腹も膨れてしばし、ボーっとする。この時間が一番幸せだと思う。

そういえば、入学以来誰かと一緒にお昼ご飯を食べたのは初めてだった。……お互い無言で貪り食っていただけだけれど。

それでも、誰かと食べるご飯は美味しい。一人で食べるよりずっと。

入学して二週間弱経つけれど、いまだに友達と呼べるような人間がいない。

もしかして、この子なんかより僕こそ社会不適合者……？

あ、なんか目からお茶が出そうだ。やっぱりのどに詰まりそうだからって一気飲みは悪かったのだろうか。

そんな感じで僕が真昼間なのに黄昏していると、校舎の方から、一人の女生徒が駆けてきた。

キヨロキヨロと辺りを見回しているところを見ると、誰かを探しているようだけれど。

彼女は僕たちの方を見ると、

「ゆかり！」

と声上げて、まっすぐ僕たちの方へ走ってきた。

僕の名前は夏目賢二。「ゆかり」などというかわいらしい名前ではない。必然的に胃袋少女キティちゃん（仮）のことだろう。

へえ、ゆかりちゃんね。なかなかどうして可愛い名前だ。確かに食欲と会話能力さえ目をつぶれば、見掛けにふさわしい名前だと思う。

考え事をしている間に女生徒が到着。お疲れ様です。

「やっぱりここだった。次移動教室でしょ。化学。そろそろ準備しないと、遅れちゃ……」

そこでふと僕に気が付いたようだ。背は百六十五センチの僕と同じくらいだろう。女子にしては高い。髪はセミロングでつややかな黒。きつと今まで染めたことなど無いに違いない。ノンフレームのメガネの向こうには勝気な瞳が見える。なんか委員長って感じの人だ。キティちゃん——改めゆかりちゃんほどの美少女ではないにしても、十人中七人は美人だというに違いない。

上履きのラインは紺——ということは二年生か。一年生の僕は赤だ。三年生は緑でした。

………ってあれ？

移動教室だと呼びにくる↓つまり呼びに来た委員長（仮）とゆかりちゃんは同級生と思われる↓つまりゆかりちゃんは——

「に、にねんせい!？」

思わずひらがなで叫んでしまった。

スニーカーだったから気が付かなかった。同じく学年別に色分けされているリボンタイもゆかりちゃんはつけていなかったたので、てつきり同じ一年生だとばかり思っていた。

ちよつと声が大きかったので、ゆかりちゃん——もう一度改めゆかり先輩——と呼びに来た二年生委員長（仮）はびっくりしたようだった。

でもきつと彼女たちのびっくりは、僕のびっくりには足許にも及ばないだろう。

「えー、と君は？」

委員長（仮）が僕に問いかける。名乗ろうとした僕に、それより早く委員長（仮）が言葉をつなげた。

「ああ、先にこっちが名乗るべきよね、私は二年四組の清水聖子。でこっちの——多分自己紹介もしていないだろうから、一応——ちっちゃいのが、同じクラスの式部ゆかり」

鋭い。僕今はじめて一緒にご飯食べた人のフルネーム知りましたよ。

「僕は一年三組の夏目です。夏目賢二」

「夏目君。ごめんね、うるさくして。せつかくのお昼休みに。ほら、ゆかり、行こう?」

同級生というよりはまるで姉妹だな。いや、母子の方が正しいかもしれない。

もつと遊びたいと公園に居座りたがる幼稚園児、を叱る母の図。もしくは一人はぐれた娘を首根っこくわえて連れて行こうとする

母猫。みたいな。

「いや」

小さいくせにどこにそんな力があるのか、背にして座っていた桜の木の下にしがみついているのはなれないゆかり先輩。この人ホントに僕より一年長く生きているのだろうか。

引きずってでも連れて行くかと思われた清水先輩は早々に諦めたらしく、ため息をついた。

「ゆかり、ただでさえ化学は苦手ですよ。『いや』なんて言わないで、行こうよ。一年の時みたく、出席日数がまずいことになるよ?」
「どうやらゆかり先輩は化学が嫌いらしい。それも出席日数がまずくなるほどのサボりっぷりを一年次において披露しているそうだ。一年生である僕の前で恥をさらすことによって、言うことをきかせようとしているのか。なかなかの策士ぶりである。」

と、のんきにそんな二人を眺めていた僕だったが、そんな僕に向けて半分ねめつけるような熱い視線を向けるゆかり先輩。

「え」

ゆかり先輩の視線に気づいた委員長改め清水先輩も僕を見る。

「明日も」

相変わらず単語しかしゃべらないゆかり先輩。マジで社会不適合者なのか。そして依然として意味が分からない。せめてもう一言二言しゃべってください。二歳児だってもっと達者にしゃべりますよ。近所に住む安奈ちゃん（二歳児・おませさん）はゆかり先輩の優に十倍はしゃべる。将来はきっと井戸端会議大好きおばさんだ。

「? ゆかり、お水全部飲んでないじゃない。お昼パンじゃなかったの?」

確かにゆかり先輩のペットボトルはあと三分の一ほど残っていた。パンはご飯に比べて水分が少ない。故に飲み物がご飯より減ることが多い——のだが

……。

この先輩、どこまで鋭いんだ。ペットボトルを一目見て、ゆかり

先輩の昼食を推理している。しかも当たっている！

「あの、僕の弁当と交換したんです」

お互い合意の上なので別にビビる必要は無いのだが、下手をする
と僕が強要したとしか思えない図が完成してしまう。ここは慎重に
ならねばなるまい。

「交換？ お弁当と……カツサンドを？」

「な、なんでカツサンドがあつたってわかるんですか！？」

絶対超能力者だよ、この人！！

「ああ、『ひなたのパン屋』のカツサンドって一日二十食限定なの。
だから袋に一から二十までの数字が書いてあつて、すぐにカウント
できるようにしているって、店長さんが前言つてたから……。ほら、
その袋、一つて書いてあるでしょ」

そうですね、書いてあります。小指の先ほどの大きさにアラビア
数字「いち」が。

すばらしい観察眼です。

「え！？ でも、つてことは……ゆかり『ひなた』のカツサンド大
好きでしょ！？ それあげてまで食べたかつたの！？」

清水先輩は目を丸くして驚いた。問いかけは若干悲鳴に近い。

きつと彼女にとつてはものすごく驚嘆すべきことなのだろう。僕
で例えるなら、姉さんが「実は私、SMにすごく興味があるの。そ
れ系の本を賢二君（姉は僕をこう呼ぶ）には黙っていたけど、畳の
下に敷き詰めて隠しているのよ。50冊ほど」と告白されるくらい
驚くことなのかもしれない。うーん、分かりにくい。

「下からとてもいい匂いがしたから」

「下？ ああ、また桜の木に登つてたのね」

すごいこの人。本当に本当は超能力者かもしれない。普通下から
とか言われても木の上にいたとか思わないよな。それとも少なくとも
も高校一年生以来の付き合いのなせる業なのだろうか。いや、間違
いなく後者なんだろうけど。

「そんなに豪華なお弁当だったの？」

だったら申し訳ない、というようにこちらを伺う清水先輩。この問いかけは僕に対してのものようだった。ので、素直に答える。

「普通ですよ。唐揚げと金平ごぼう、ひじきの煮物に、ブロッコリーとミニトマト……」

「アスパラのベーコン巻き」

ぽつりと呟きが聞こえる。小さいのによく通る声だなあ。

「あ、そうそうそれもです。」

「ふりかけも」

「余りもんで作ったものですけど」

「とても美味しかった」

うわ、ちょっと嬉しいかも。ていうか、かなり嬉しい。

男の趣味が料理というと高校生にもなれば理解のある人が増えたけど、小学生くらいの時には一部の男子からはつきり言って馬鹿にされた。こっちは好きこそ物の上手なれ、で多少は自信があったのに、食べもしないで馬鹿にされるなんて腹の立つことこの上なかった。

「で、明日も夏目君のお弁当が食べたい、と」

あ、先ほどの謎の言葉『明日も』はそこにかかってくるのか。なるほど。頭の中で豆電球が点灯した気がした。

「……え、明日も？」

こくり、と頷くゆかり先輩。その瞳は「お願い、作って？」というよりは「食わせろ」と命じているように見えます。

「ゆかり、わがままはダメよ。あなた食べる量普通の人の二、三倍はあるんだし。何より、ただで作ってもらうだなんて。あなた二年生でしょ？ 下手すればパワハラよ」

会社や組織ならともかく、学校でパワハラってなんか変な感じだ。いや、学校も一応組織だけど。てことは体育会系ってある意味パワハラの要素があるってことかな。

「パン買っ」

「………はあ。夏目君。ゆかり、明日もパン買ってくるから、お

弁当と交換してほしいの」

通訳ご苦労様です。

「まあ、そうなればまた今日みたいに物々交換になりますから、僕としては異存ありませんけど。でも、逆にパンの方が高くついちゃうんじゃないですか？ あのカツサンド諸々学生仕様にしたって結構すると思うんですけど……」

うちは基本的に節約家なので、タダでもう一人分作ってあげることはできない。けち臭いことを言うようだけど。だってゆかり先輩、どうがんばっても『一人分』じゃないし。かと言って、持ってきた弁当の原価よりも数倍するパンを買ってもらうのもちよつとバランスが悪い気がする。これじゃ不等価交換だ。

「いい」

「本人がこう言ってるんだし、別にいいと思うけど。原価以上だと思っ分に関しては労働報酬ってことで十分つりあうと思うわよ？」

肩をすくめて清水先輩が苦笑いする。

「それに、この子食にかけては梃子でも動かない頑固者なの。実際今も木にへばりついて離れないし」

文字通りですね。

「私からもお願いするわ。じゃないと本当に授業に遅刻しちゃうし」
言われて携帯で確認すると、確かに始業もう五分前を切っている。僕もそろそろ教室に戻らないとまずい。

「わかりました。じゃあ、明日もここで」

「本当にごめんね。ほら、ゆかりもお礼言って」

「ありがとう」

僕が了承の意を告げると、先ほどまでの引っ付きっぷりが嘘のように、流れるような動きで木から離れた。

お礼を言ったゆかり先輩は相変わらずの無表情だったけど、嬉しげに微笑んだように見えた。

第一話 桜の下の物々交換。 その二（後書き）

一応料理については勉強していますが、もしご不満な点や、異論、間違った表現をしている場合は、ご遠慮なくお知らせください。参考にさせていただき、精進しますので、よろしく願います。また、感想も頂けると飛び上がって喜びます。

第一話 桜の下の物々交換。 その三

校舎の中へ駆けて行く先輩たちを見送って、僕も教室へ戻ることにした。それにしてもゆかり先輩。スニーカー——つまりは外履きのままだったけど、大丈夫かな。靴箱へ寄っていく時間があつたとは思えないけど。

ああそうだ、明日のお弁当のおかずは何にしよう。僕が食べることは無いけれど、人に——それも家族以外の人に食べてもらうのだから、いつも以上に気が抜けない。できるなら、また「おいしい」といつて欲しいし。

つらつら考えながら歩いていたら、すぐに教室に着いた。

始業開始一分前。

僕の席はちょうど教室のと真ん中辺りにある。現在席順は純粋な名前順で、僕はナ行だからね。そう言えば今度のLHRで席替えをすと言っていた。話しやすそうな人が隣近所になってくれるといいなあ。

さすがに始業開始直前だったので、僕の席には誰も座っていない。これがもう十分前だったら誰か座っていたかもしれないけど。いや、座ってもらえるだけありがたいと思わなければ。場合によっては「この席の人キモイんだよ」などと言われているかもしれないのだ。

これだけマイナス思考だといざ本当にそうなった時、まだ心に余裕が持てる。

うん。期待は敵だ。贅沢と同じくらい。

始業直前とはいえ、まだ先生は来ていない。よって、教室はなかなか騒がしい。

ナ行の僕の後ろは西村君と言うらしい。自己紹介の時、せめて両隣と前後の人の苗字は覚えるようにした結果得た情報だった。

僕が席に着こうとした時、その西村君の口からちよつと気になる単語が飛び出した。

「ホントだつて！ 兄貴が言つてたんだから！！ あるんだよ出張パン屋にカツサンド！」

はて、それは先ほど僕が自分の弁当引き換えに食べたあのカツサンドだろうか。あの限定二十食の。

席に着いた僕は次の授業の教科書とノートを取り出す。次は数学だつた。

「見た事ねえぞ、カツサンドなんて。お前絶対その兄貴に担がれてれるんだつて」

「そうだよ。オレだつてあんなこと言われたから食つてみたくなつて、昼休み開始すぐに買いにいったんだぜ。でもなかったぞそんなもん」

限定二十食は伊達ではないと言うことか。そう言えば四時限目終了と共に教室を飛び出していった人が何人かいたな。僕はそもそも弁当を食べるつもりだったので、見送る側だったけど。

西村君が彼ら二人に――残念ながら彼らの名前はよく覚えてない――どんな風にあのカツサンドについて語ったのかは不明だけれど、確かにアレはおいしかった。近年稀に見るヒット商品だ。

「っだゝゝ！！ 兄貴はホラ吹きなんかじゃねえっ！！」

さすがに西村君が少し気の毒になつてきた。なので、僕にしては珍しいけれど、本当に珍しいけれど、口を挟んでみる。最悪無視されてしまうことを想定して。うん、期待はしない。

「……僕食べたけど、カツサンド」

『マジ！？』

小声だつたにもかかわらず、しっかり聞こえたらしい。反論していた二人からは驚きの声が、西村君からは喜びの声が上がった。

予想外の食いつきぶりに、ひどくうろたえる僕。

「……うん、限定二十食なんだつて、ちよつと事情があつて、先輩からもらつたんだ」

「えっ！？ 限定品なのかソレ」

「でもメニユーにも載つてなかったぞ」

「あつてもすぐに売り切れる商品つばかったし……もしかしたら最初からメニューには無いのかも」

おそろおそろ自分の意見を述べてみる。

「高校の購買パンに『限定』でしかも『裏メニュー』かよ……」

「そりゃ新人生にはわからないよなあ……」

二人はどうやら納得してくれたみたいだった。よかった。僕までホラ吹き扱いされずにすんで。なにより西村君の立場も守られただろう。めでたしめでたし――

「なあなあ。その噂のカツサンドってどんなだった？」

「っていつか、いくら!？」

――と思ったら、矢継ぎ早に質問が繰り広げられる。

「値段は一個四百円だって兄貴が言ってた」

西村君も加わった。金額に関してはもらい物なので知らなかった。西村君ありがとう。

というか、カツサンドあのボリュームにしては結構安いんですね。もちろん他のパンに比べたら高いんだろうけど。

もう少し話していたかったけれど（なにせ友達ができるチャンスである）、先生が来てしまったので、話はそこで一旦終了してしまった。残念だけれど仕方ない。学生の本分は友達作りじゃなくて学業だし。

改めてきちんと席に着き、筆記用具等の準備をした。授業はじめての挨拶をして先生が点呼を取る。僕までは少し時間がある。

すると、後ろから何かでつつかれる。なんだろう？

振り返ると、西村君がまだ芯の出ていないシャープペンを持って、苦笑い交じりの笑顔を浮かべていた。

「サンキュな、おかげで俺も兄貴もうそつき呼ばわりされずにすんだ」

こそり、と小声でお礼を言われた。

僕は嬉しくなって、自然に笑顔が浮かぶ。

「お礼を言われることじゃないよ、カツサンドがおいしかったのは

本当のことだし」

二人で少し笑いあう。

先生が僕の名前を呼んだので、慌てて返事をした。

ついで、西村君も同様に呼ばれて返事をする。

とんだお昼休みだったけど、僕にもようやくと新しい友達ができ
たみたいで。

僕は子猫みたいな先輩に、心の中でこっそりお礼を言った。

第一話 桜の下の物々交換。 その三（後書き）

これ一応第一話は終了です。

ごらん頂ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9243h/>

子猫と昼食を

2010年10月10日20時12分発行